

入学時の積極的サポートと大学適応感との関連

— 管理栄養士養成課程の学生を対象として —

山王丸靖子, 坂本友里, 小暮更紗

要 旨

近年, 我が国の大学生・専門学校生の中途退学率は2~3%で推移している。中途退学は, 大学・学校には負の影響を与え, 学生本人には時間と資金の浪費につながる。中途退学の理由は様々ではあるが, 大学生活が充実することで中途退学を防げる可能性がある。

本研究では, 2024年度城西大学薬学部医療栄養学科に入学した学生62人を対象として, 入学時の積極的サポート（フレッシュマンキャンプ, ピアサポート）と大学適応感（11項目）との関連について検討した。各サポートに参加したのは対象者のうち約半数であった。どちらのサポートも, 参加した者は90%以上が満足したと回答した。ピアサポートにおける相談内容は履修に関することと勉強方法が多かった。大学適応感の結果は, 大学適応を示すポジティブ項目の得点が大学不適応を示すネガティブ項目の得点よりも高い点数を示した。両サポートと大学適応感の各項目との関連では, ピアサポートへの参加と試験不安に関する項目との間に有意な関連が認められた。今後は両サポートともに, 多くの新入生が参加できるような方法の策定が望まれる。特にピアサポートは, 学業について継続的に相談できる環境の整備が必要である。

キーワード：大学適応感, フレッシュマンキャンプ, ピアサポート

1. はじめに

文部科学省（2022）の調査によると, 全国の国公立大学（短期大学含む）及び高等専門学校における, 学生の中途退学率（中退率）は, 1.95%と報告されている。退学の理由としては, 転学等が16.3%で最も高く, 次いで学生生活不適応・就学意欲低下が15.7%となっている。

また, 私立大学だけを対象とした調査として, 日本私立学校振興・共済事業団の報告によると, 回答が寄せられた私立大学550校で1年間に約5万5000人の退学者を出している。この中退率は加重平均で2.9%（単純平均で3.3%）に上っているとされる。その理由として, 「その他」が23.4%,

「進路変更」が21.0%, 「経済的困窮」18.6%, 「就学意欲低下」14.2%となっている。理由として最も多い「その他」においては「一身上の理由」として処理がおこなわれているが, 実際の内容には踏み込まれていない（船戸, 2024）。

一般に国家資格取得系学部の中退率は低いことが報告されている（船戸, 2024）。近年の城西大学薬学部医療栄養学科における退学率は, 概算で5%程度を推移している。中退の理由は, 文部科学省（2022）の調査結果とほぼ同様であり, 中でも就学意欲低下と関連する単位未修得から留年に至り, 退学を選択する学生が存在している。国家資格である管理栄養士の受験資格を得るためには, 卒業要件として78科目131単位以上の取得が

必要であり、入学当初から多くの必修科目を履修しなければならない。そのため、学生は学業に関する負担感を大きく感じていると推測される。

大学中退者の増加は、大学の学生募集や教育の質に大きい負の影響を与えるだけでなく、学生自身の時間と資金の浪費につながっていることが指摘されている（白鳥，2020）。予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を持つ人材を育成するための役割を大学は担わなければならない（中央教育審議会，2012）、学生が大学生活に適応し休学あるいは退学にならないよう支援する責務がある。

大学入学後に、学生が大学生活に適応し、学生生活を充実させるための重要な要因として幸福感があげられる（阿久津，2019）。幸福感とは、感情状態を含み、家族・仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念とされている（Diener *et al*, 1999）。この幸福感を構成する要素として大学適応感が報告されており、これは「大学生活全般において満足し、適応していると感じる程度」を指している（大隈，2013）。祁ら（2011）は、幸福感の高い学生は、学校適応感（吉田，他，2002）が高く、両者は大きく関連していると報告した。そのことから、大学適応感を高めることは、大学生の幸福感を高め、大学の中退率の減少に繋がることが期待できる。

大学適応感を高めるためには、学生生活を充実して過ごすための支援が必要であり（安達，2019）、特に新入生を対象とした支援については、論理情動療法に基づく60分間のセッション（荒木，他，2013）、スキルトレーニングを取り入れた体育実技（西田，他，2009）、3泊4日のキャンプ体験（林，他，2018）等が報告されている。城西大学薬学部においては、学生支援の一つとして毎年度、新入生への積極的サポートとして入学前にフレッシュマンキャンプ（2020年から

2023年度はコロナ禍により休止）、入学直後にピアサポートを実施している。

これらのサポートは、城西大学について学び、友人をたくさん作ることににより、安心して新しい生活がスタートできることを目的としている。フレッシュマンキャンプは薬学科、薬科学科、医療栄養学科の3学科合同で、ピアサポートは学科ごとに実施されている。

フレッシュマンキャンプへの参加勧誘は、入学予定者に対して入学説明書類を郵送する際に、フレッシュマンキャンプに関する説明書を同封して参加を募っている。2024年度のフレッシュマンキャンプの実施は、大学入学前の3月29日から30日にかけて、埼玉県内のホテルで実施された。医療栄養学科からは、担当教員が4名、2年生以上の学生がサポーターとして16名参加した。実施内容は担当教員による研修（大学紹介、大学生の心構えなど）、上級生による企画（ジェスチャーゲームなど）を行った。

2024年度のピアサポートは、入学時ガイダンスで日時と場所、簡単な内容を記載したチラシを配布し、口頭で説明して参加を募った。大学入学後の4月第1週から2週にかけて合計3回実施した。参加者の人数に応じて、各回1～2時間程度、上級生3～4人と担当教員1名が学科建物のロビーに待機し、新入生が自由参加する形式をとった。

これらのサポートは、コロナ禍による中止年度を除き、10年以上にわたり継続して実施されている。しかし、これまでのところサポートの実施と入学後の学生の大学適応感との関連について、検証は行われていない。そこで本研究では、フレッシュマンキャンプあるいはピアサポートへの参加と入学後の大学適応感との関連を明らかにし、今後のサポートの改良につながる資料を得ることを目的として調査を行ったので報告する。

2. 方法

2.1 対象者

2024年度に城西大学薬学部医療栄養学科へ入学した62人（回収率95%，有効回答率100%）を対象とした。Microsoft FormsによるWebアンケートを無記名式で実施した。対象者の性別は男性17人（27.4%），女性44人（71.0%），不明（選択肢：回答したくない）1人（1.6%）であった。

2.2 実施時期

調査は、2024年6月19日および26日の調理学実習時にMicrosoft Formsによる無記名式アンケートを実施した。アンケート回答をもって同意を得たものとみなし、アンケート回答後には、無記名式のため回答を撤回できないことを口頭および文書で説明した。

2.3 調査内容

調査内容は、フレッシュマンキャンプおよびピアサポートへの参加の有無とそれらの満足度について質問した。

ピアサポートについては、参加したと回答した者を対象として、参加のきっかけと相談内容について質問を行った。参加しなかったと回答した者には、参加をしなかった理由について質問した。

大学適応感（11項目）は、阿久津（2019）の報告を参考として作成し、全員を対象として質問を行った。項目のうち1から3はポジティブ項目、4から11はネガティブ項目であった。ネガティブ項目のうち、4から7は大学不適応に関する項目、8から11は試験不安に関する項目であった。選択肢は、よくある・感じる（4点）、ときどきある・感じる（3点）、あまりない・感じない（2点）、全くない・全く感じない（1点）の4件法とし、点数化した結果から、平均点を算出した。質問項目は表5に示した文言通りの11項目で

ある。

フレッシュマンキャンプあるいはピアサポート参加の有無と大学適応感との関連は、 χ^2 検定を行った。統計解析はIBM SPSS Statistics Ver.27（SPSS Inc., Chicago, IL, USA）を用いた。

2.4 倫理的配慮

本研究は、倫理面および個人情報への配慮を盛り込んだ研究計画書を作成し、城西大学人を対象とする生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（整理番号2024-03）。

対象者には調査の目的を説明すると共に、回答は無記名式で個人は特定されない事および任意である事を口頭で説明した。また、回答しなくても単位の取得および成績には影響しない事を口頭で説明した。これらの説明文書はWebClassで公開した。

3. 結果

1) フレッシュマンキャンプへの参加と満足度

表1には、フレッシュマンキャンプへの参加の有無と参加者の満足度、表2にはピアサポートへの参加の有無と満足度の結果を示した。フレッシュマンキャンプへの参加率は50%（31人）、ピア

表1 フレッシュマンキャンプ参加の有無と満足度

項目		人数	(%)
参加 (62人)	した	31	(50.0)
	しない	31	(50.0)
満足度 (31人)	とても満足した	16	(51.6)
	まあ満足した	13	(41.9)
	あまり満足しなかった 満足しなかった	0 2	(0.0) (6.5)

表2 ピアサポート参加の有無と満足度

項目		人数	(%)
参加 (62人)	した	25	(40.3)
	しない	37	(59.7)
満足度 (31人)	とても満足した	17	(68.0)
	まあ満足した	8	(32.0)
	あまり満足しなかった 満足しなかった	0 0	(0.0) (0.0)

サポートへの参加率は40.3%（25人）であった。フレッシュマンキャンプ、ピアサポートともに、参加者の満足度は高かった。

ピアサポートに参加したと回答した25人を対象として、参加のきっかけと相談内容について質問した。結果は表3に示した（複数回答）。友達に誘われた、先生にすすめられたとの回答がともに30%以上を占めた。なお、参加者は友人と2人以上で参加しており、1人でピアサポートに参加した者はいなかった。相談内容で最も多かったのは、履修について（38.3%）であった。次いで勉強方法、サークル活動が挙げた。

ピアサポートに参加しなかった37人を対象としてその理由を質問した。結果は表4に示した。理由として最も多かったのは、相談する内容がなかった／しなくても大丈夫だった（31.2%）であった。

表5には大学適応感の結果を示した。項目1～

表3 ピアサポート参加のきっかけと相談内容（25人）

	項目	件数	(%)
きっかけ (31件)	友達に誘われた	11	(35.5)
	先生にすすめられた	10	(32.3)
	チラシを見た	5	(12.9)
	先輩にすすめられた	4	(16.1)
	看板を見た	0	(0.0)
	その他	1	(3.2)
相談内容 (60件)	履修	23	(38.3)
	勉強方法	15	(25.0)
	サークル活動	13	(21.7)
	アルバイト	7	(11.7)
	クラブ活動/委員会活動	2	(3.3)
	友人関係	0	(0.0)
	その他	0	(0.0)

（複数回答）

表4 ピアサポートに参加しなかった理由（37人）

	項目	件数	(%)
理由 (48件)	相談する内容がなかった／しなくても大丈夫だった	15	(31.2)
	時間がなかった	14	(29.2)
	一人では行きにくかった	11	(22.9)
	開催時間・場所を忘れた	6	(12.5)
	その他	2	(4.2)

（複数回答）

3はポジティブ、項目4～11はネガティブな質問を示している。ネガティブな項目のうち、1～4は大学不適応に関する項目、8から11は試験不安に関する項目である。選択肢を1点から4点へと点数化し、平均得点を算出した。点数は高いほうが当てはまる割合が高いことを示している。ポジティブな質問の項目1～3は3.1点から3.3点を示した。ネガティブな質問のうち、4～7の大学不適応を示す項目は1.5点から2.3点と低い傾向であった。しかし、試験不安を示す項目8～11は2.7点から3.6点と大学不適応の項目よりも高い傾向を示した。

表6-1、表6-2には、フレッシュマンキャンプ参加の有無と大学適応感との関連を示した。大学適応感におけるポジティブ項目、ネガティブ項目ともに、フレッシュマンキャンプの参加との間に有意な関連が認められた項目はなかった。

表7-1、7-2には、ピアサポートへの参加の有無と大学適応感との関連を示した。参加の有無とポジティブ項目との間には関連は認められなかった。一方、試験不安に関するネガティブ項目のうち、「10. 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがありますか」のみ、ピアサポートへの参加との間に有意な関連が認められ（ $p=0.037$ ）、参加した者のほうが「よくある・時々ある」と回答した。

4. 考察

本研究では、大学入学時における積極的サポートと入学後の大学適応感についてアンケート調査を行い、両者の関連を検討した。調査は、入学後約2か月が経過し、春学期が半分終了した時点で実施した。

フレッシュマンキャンプ、ピアサポートともに約半数の対象者が参加していた。フレッシュマンキャンプのみ「満足しなかった」と回答した者が

表5 大学適応感 (62人)

項目		人数(%)				平均得点	
		よくある	時々ある	あまりない	全くない		
ポジティブ 大学適応	1	大学生生活が充実していると感じることがありますか。	28 (45.2)	27 (43.5)	5 (8.1)	2 (3.2)	3.3
	2	現在の専攻に対する興味が深まってきていると感じますか。	27 (43.5)	28 (45.2)	7 (11.3)	0 (0.0)	3.3
	3	この大学が自分に合っていると思うことがありますか。	16 (25.8)	36 (58.1)	9 (14.5)	1 (1.6)	3.1
ネガティブ 大学不適応	4	この大学にいたら自分がだめになると暗い気持ちになることがありますか。	4 (6.5)	10 (16.1)	25 (40.3)	23 (37.1)	1.9
	5	できることなら、転学あるいは転専攻したいと思うことがありますか。	1 (1.6)	12 (19.4)	15 (24.2)	34 (54.8)	1.7
	6	大学を退学したいと思うことがありますか。	2 (3.2)	2 (3.2)	19 (30.6)	39 (62.9)	1.5
	7	入学した専攻が自分に合っていないと思うことがありますか。	1 (1.6)	22 (35.5)	31 (50.0)	8 (12.9)	2.3
	8	4年間で卒業できるか不安になることがありますか。	27 (43.5)	25 (40.3)	10 (16.1)	0 (0.0)	3.3
	9	1時限目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安になることがありますか。	23 (37.1)	7 (11.3)	23 (37.1)	9 (14.5)	2.7
	10	授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがありますか。	20 (32.3)	29 (46.8)	11 (17.7)	2 (3.2)	3.1
	11	成績のことで心配することがありますか。	40 (64.5)	19 (30.6)	3 (4.8)	0 (0.0)	3.6

2名いたものの、両サポートとも参加者の満足度は高かった。この結果から、参加することにより他者との関わりが生まれ、「参加して良かった」という満足度につながると考えられた。

ピアサポート参加のきっかけは、「友達に誘われた」が最も多く、一人で参加した者はいなかった。不参加の理由として「一人では行きにくかった」との回答が挙がっており、入学直後にはまだ友人ができておらず、誘い合っただけの参加につながらなかったと考えられた。

参加のきっかけとして「先生にすすめられた」との回答も多く、教員の言葉掛けは一定の役割を果たし有効な手段であったことが明らかになった。なお、入学時ガイダンスでピアサポートの開催場所・時間を記載したチラシを配布しており、それを見て参加した者もいたことから、チラシは情報伝達手段として機能していたと考えられた。最も相談が多かった「履修」は、ピアサポートの実施1回目、2回目は履修申請前であったため

あると考えられた。

ピアサポートについて、沖(2012)は、「国内の大学では概ね『報奨のあるなしに関わらず、同じ学生(peer)同士が専門性を持つ教職員の指導(supervision)のもと、仲間同士で援助し、学びあう制度(プログラム)』と理解されている」と述べている。ピアサポートは、近年では様々な大学における活動実績が報告されている(大久保, 2024; 高橋, 2014; 沖, 2017; 松田, 2020)。

本研究で用いた11項目の大学適応感尺度では、試験不安に関する47項目(8~11)は、尺度の信頼性が低いと述べている。しかし、本研究では、試験不安に関する項目を測定する必要があると考えたため、全11項目の合計点数による大学適応感は算出せずに、項目ごとに得点の算出を行った。それらを用いてサポートへの参加との関連について、 χ^2 検定により解析を行った。

大学適応感の結果では、ポジティブな項目の平均点数が、ネガティブな項目よりも高い得点結果

を示した。しかし、ポジティブな項目のうち「1. 大学生活が充実していると感じることがありますか」について「まったくない」と2名が回答した。「3. この大学が自分に合っていると思いますか」の項目においても「まったくない」と1名が回答した。これらの対象者は、5月の調査時点において、すでに大学中退への危険を含んでいる可能性があると考えられた。

一方、ネガティブな項目については、大学不適応に関する4項目（4～7）の平均点数は1点～2点台と低かった。しかし2.3点を示した「7. 入学した専攻が自分に合っていないと思うことがありますか」の項目において、「よくある・時々ある」と回答した者の合計が37.1%を示した。この結果は、項目8～11の試験不安との関連が推測された。試験不安に関する得点は大学不適応に関する項目と比較すると全体的に高かった。すなわち、学業に関して不安を感じており、それに伴い専攻が自分に合っていないと感じる可能性が推測された。

フレッシュマンキャンプへの参加の有無と大学適応感との間において、統計的な関連は認められなかった。しかし対象者の回答の分布では、フレッシュマンキャンプ参加者における大学適応感が全体的に高い傾向であった。ポジティブ項目の「1. 大学生活が充実していると感じることがありますか」では、参加した者のうち半数以上が「よく感じる」と回答しており、有意な差は認められなかったものの、その割合は不参加の者よりも多かった。現在のところ、フレッシュマンキャンプは自由参加でかつ一部負担金もある。開催時期も大学入学前であるため、地方からの入学者には引越時期と重なり、参加できなかったとの意見も聞かれた。しかし、フレッシュマンキャンプに参加することで、入学前に大学生活に触れ、友人ができることで、新しい生活をイメージできるようになると推測され、一定の成果を上げてい

ると推測された。参加者の満足度も高かったことから、今後は満足した理由についても精査し、参加率を上げるための取組が必要である。

ピアサポートへの参加の有無と、大学適応感との関連では「10. 授業中、先生の言っている内容がわからなくて不安になることがありますか」のみ両者間に有意な関連が認められた。ピアサポートの相談内容では、「勉強方法」が「履修」に次いで上位にあがった。この結果から、入学直後に勉強に対する不安を持っていた対象者は、入学後2か月が経過した調査時点においても授業についていけるか不安を感じていることが示唆された。

一方、ピアサポートに参加しなかった理由として「相談しなくても大丈夫」との回答が最も多かった。この結果は逆説的に、履修や勉強方法に不安のない対象者はピアサポートには参加しなかったことを示している。

Worleyら（2023）は、大学生を対象として、ピアサポートと学業、不安感との関連について縦断的な調査を実施し、大学生活の早い時期において学力に自信のある者は、学年が進んだ後にピアサポートに頼ることが少ない可能性があるとして述べている。一方で、Altermatt（2019）は、仲間からサポートされていると感じている学生は、学業に対する高い自己効力感および学習意欲といった効果的な教育成果が得られることを報告している。

本研究の結果では、試験不安に関する項目について「よくある・時々ある」と回答するものが多く、入学後2か月が経過した時点でも、学業に対する不安を持っていた。そのため、ピアサポートは入学直後だけではなく、1年生を対象として、主として学業に関する継続的な実施を検討する必要があると考えられた。その際には、対象者の満足度とその内容を精査し、より質の高いサポートを提供することが望まれる。

表6-1 フレッシュマンキャンプ参加の有無と大学適応感（ポジティブ）との関連（62人）

					人数(%)
大学適応感 項目	選択肢	フレッシュマンキャンプ参加の有無		p値	
		した(31人)	しない(31人)		
大学適応	1 大学生生活が充実していると感じることがありますか。	よく感じる	16 (51.6)	12 (38.7)	0.638
		ときどき感じる	11 (35.5)	16 (51.6)	
		あまり感じない	3 (9.7)	2 (6.5)	
		全く感じない	1 (3.2)	1 (3.2)	
	2 現在の専攻に対する興味が深まってきていると感じますか。	よく感じる	13 (41.9)	14 (45.2)	0.851
		ときどき感じる	15 (48.4)	13 (41.9)	
		あまり感じない	3 (9.7)	4 (12.9)	
		全く感じない	0 (0.0)	0 (0.0)	
	3 この大学が自分に合っていると思うことがありますか。	よくある	9 (29.0)	7 (22.6)	0.614
		ときどきある	16 (51.6)	20 (64.5)	
		あまりない	5 (16.1)	4 (12.9)	
		全くない	1 (3.2)	0 (0.0)	

表6-2 フレッシュマンキャンプ参加の有無と大学適応感（ネガティブ）との関連（62人）

					人数(%)
大学適応感 項目	選択肢	フレッシュマン参加の有無		p値	
		した(31人)	しない(31人)		
大学不適応	4 この大学にいたら自分がだめになると暗い気持ちになることがありますか。	よくある	3 (9.7)	1 (3.2)	0.387
		ときどきある	3 (9.7)	7 (22.6)	
		あまりない	12 (38.7)	13 (41.9)	
		全くない	13 (41.9)	10 (32.3)	
	5 できることなら、転学あるいは転専攻したいと思うことがありますか。	よくある	0 (0.0)	1 (3.2)	0.771
		ときどきある	4 (12.9)	8 (25.8)	
		あまりない	6 (19.4)	9 (29.0)	
		全くない	21 (67.7)	13 (41.9)	
	6 大学を退学したいと思うことがありますか。	よくある	1 (3.2)	1 (3.2)	0.374
		ときどきある	0 (0.0)	2 (6.5)	
		あまりない	8 (25.8)	11 (35.5)	
		全くない	22 (71.0)	17 (54.8)	
7 入学した専攻が自分に合っていないと思うことがありますか。	よくある	0 (0.0)	1 (3.2)	0.082	
	ときどきある	7 (22.6)	15 (48.4)		
	あまりない	18 (58.1)	13 (41.9)		
	全くない	6 (19.4)	2 (6.5)		
8 4年間で卒業できるか不安になることがありますか。	よくある	11 (35.5)	16 (51.6)	0.277	
	ときどきある	13 (41.9)	12 (38.7)		
	あまりない	7 (22.6)	3 (9.7)		
	全くない	0 (0.0)	0 (0.0)		
9 1時限目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安になることがありますか。	よくある	11 (35.5)	12 (38.7)	0.186	
	ときどきある	1 (3.2)	6 (19.4)		
	あまりない	14 (45.2)	9 (29.0)		
	全くない	5 (16.1)	4 (12.9)		
10 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがありますか。	よくある	7 (22.6)	13 (41.9)	0.403	
	ときどきある	16 (51.6)	13 (41.9)		
	あまりない	7 (22.6)	4 (12.9)		
	全くない	1 (3.2)	1 (3.2)		
11 成績のことで心配することがありますか。	よくある	18 (58.1)	22 (71.0)	0.359	
	ときどきある	12 (38.7)	7 (22.6)		
	あまりない	1 (3.2)	2 (6.5)		
	全くない	0 (0.0)	0 (0.0)		

表7-1 ピアサポート参加の有無と大学適応感（ポジティブ）との関連（62人）

				人数(%)	
大学適応感 項目	選択肢	ピアサポート参加の有無		p値	
		した(25人)	しない(37人)		
大学適応	1 大学生活が充実していると感じることがありますか。	よく感じる	12 (48.0)	16 (43.2)	0.480
		ときどき感じる	12 (48.0)	15 (40.5)	
		あまり感じない	1 (4.0)	4 (10.8)	
		全く感じない	0 (0.0)	2 (5.4)	
	2 現在の専攻に対する興味が深まってきていると感じますか。	よく感じる	13 (52.0)	14 (37.8)	0.263
		ときどき感じる	11 (44.0)	17 (45.9)	
		あまり感じない	1 (4.0)	6 (16.2)	
		全く感じない	0 (0.0)	0 (0.0)	
	3 この大学が自分に合っていると思うことがありますか。	よくある	8 (32.0)	8 (21.6)	0.653
		ときどきある	13 (52.0)	23 (62.2)	
		あまりない	4 (16.0)	5 (13.5)	
		全くない	0 (0.0)	1 (2.7)	

表7-2 ピアサポート参加の有無と大学適応感（ネガティブ）との関連（62人）

				人数(%)	
大学適応感 項目	選択肢	ピアサポート参加の有無		p値	
		した(25人)	しない(37人)		
大学不適応	4 この大学にいたら自分がだめになると暗い気持ちになることがありますか。	よくある	1 (4.0)	3 (8.1)	0.484
		ときどきある	4 (16.0)	6 (16.2)	
		あまりない	8 (32.0)	17 (45.9)	
		全くない	12 (48.0)	11 (29.7)	
	5 できることなら、転学あるいは転専攻したいと思うことがありますか。	よくある	0 (0.0)	1 (2.7)	0.771
		ときどきある	4 (16.0)	8 (21.6)	
		あまりない	6 (24.0)	9 (24.3)	
		全くない	15 (60.0)	19 (51.4)	
	6 大学を退学したいと思うことがありますか。	よくある	0 (0.0)	2 (5.4)	0.217
		ときどきある	0 (0.0)	2 (5.4)	
		あまりない	6 (24.0)	13 (35.1)	
		全くない	19 (76.0)	20 (54.1)	
試験不安	7 入学した専攻が自分に合っていないと思うことがありますか。	よくある	0 (0.0)	1 (2.7)	0.532
		ときどきある	7 (28.0)	15 (40.5)	
		あまりない	15 (60.0)	16 (43.2)	
		全くない	3 (12.0)	5 (13.5)	
	8 4年間で卒業できるか不安になることがありますか。	よくある	11 (44.0)	16 (43.2)	0.746
		ときどきある	9 (36.0)	16 (43.2)	
		あまりない	5 (20.0)	5 (13.5)	
		全くない	0 (0.0)	0 (0.0)	
	9 1時限目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安になることがありますか。	よくある	8 (32.0)	15 (40.5)	0.362
		ときどきある	3 (12.0)	4 (10.8)	
		あまりない	8 (32.0)	15 (40.5)	
		全くない	6 (24.0)	3 (8.1)	
	10 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがありますか。	よくある	8 (32.0)	12 (32.4)	0.037
		ときどきある	16 (64.0)	13 (35.1)	
		あまりない	1 (4.0)	10 (27.0)	
		全くない	0 (0.0)	2 (5.4)	
	11 成績のことで心配することがありますか。	よくある	16 (64.0)	24 (64.9)	0.298
		ときどきある	9 (36.0)	10 (27.0)	
		あまりない	0 (0.0)	3 (8.1)	
		全くない	0 (0.0)	0 (0.0)	

本研究の限界として以下の点を挙げる。1点目は大学適応感尺度についてである。本研究では阿久津（2019）による尺度を用いたが、そのうち、試験不安に関する項目は、信頼性が低いとされている。本研究では「試験不安」について測定を必要としたことから、全11項目を使用した。今後は試験不安について正確に測定できる信頼性の高い尺度を検討する必要がある。2点目は対象者の属性の偏りである。本研究の対象者は医療栄養学科の新入生のみであった。今後は対象者を他学部、他学科に増やし、対象者バイアスを除いて解析を行うことで大学適応感との関連について詳細に検討できる。3点目は、卒業までの追跡調査の必要性である。入学直後から卒業時まで継続した大学適応感について調査を実施することで、その変化が計測できる。今後はこれらの点を考慮した検討が必要である。

本研究の結果が、大学生活を送るうえで、より効果的なサポートの在り方の検討につながることを期待する。

参考文献

- 阿久津洋巳, 大矢薫, 若松直樹 (2019) 医療系大学生において大学適応感と自己効力感が主観的幸福感に及ぼす影響, 新潟リハビリテーション大学紀要 8 (1), 19-29.
- Altermatt, E. R. (2016) Academic Support From Peers as a Predictor of Academic Self-Efficacy Among College Students, *Journal of College Student Retention: Research, Theory & Practice*, 29, 21-37.
- 安達知郎, 安達奈緒子 (2019), 大学新入生に対するアサーショントレーニングの効果—適応感とアイデンティティ, 自己授業に注目して—, *教育心理学*, 67, 317-329.
- 荒木 光・吉田 悟・大島裕子 (2013). 大学への移行を支援する感情教育, *REBT研究*, 3, 77-89.
- 中央教育審議会大学分科会 大学教育部会 (2012), 予測困難な時代において 生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999) Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- 船戸高樹 (2007) 深刻化する退学者問題 全学的な取り組みが求められる—上—, *アルカディア学報*, 2279号
<https://www.shidaikyo.or.jp/rrihe/research/288.html> (2024年9月30日)
- 林 綾子・宮本友弘・水津真委 (2018). 初年次教としてのキャンプ体験が大学適応感に及ぼす影響についての探索的研究—Social Provision に着目して—, *野外教育研究*, 21, 1-13.
- 松田優一 (2020) 大学におけるピア・サポート普及の政策過程—「政策の窓」モデルによる考察—*総合人間科学研究* 1, 131-144.
- 文部科学省：令和5年度 専門学校生の中途退学者・休学者数等の調査結果 (https://www.mext.go.jp/content/20240628-mxt_syogai01-000024670-1.pdf) (2024年9月30日)
- 西田順一・橋本公雄・山本勝昭 (2009). 「大福帳」を用いて対人コミュニケーションスキル支援を意図した大学体育実技が初年次学生の大学適応感に及ぼす影響, *大学体育学*, 6, 43-54.
- 大久保朱音, 近藤浩子 (2024) ピアサポート及びメール・LINEを活用した大学生の悩み相談に関する調査, *The KITAKANTO Medical Journal*, 74, 59-70.
- 沖裕貴 (2017) 立命館大学のピア・サポート・プログラム—その特徴と課題, 今後の展望—, *立命館高等教育研究*, 16, 1-17.
- 沖裕貴 (2012) ピア・サポート・プログラム—立命館大学の事例—, *IDE現代の高等教育*, 546, 54-59.
- 白鳥成彦, 大石哲也, 田尻慎太郎, 森雅生, 室田真男 (2020) 中退確率の遷移を用いた中退学生の類型化, *日本教育工学会論文誌* 44, 11-22.
- 高橋伸子 (2014) 大学生のピア・サポートプログラムに関する一考察—流通経済大学社会学部初年次教育における新入生支援の事例から—, *流通経済大学社会学部論叢*, 25, 57-75.
- 祁秋夢, 浅川潔司, 福本理恵, 他：大学生の主観的幸福感と大学適応感の関係に関する日中比較研究, *学校教育学研究*, 23: 35-42, 2011.
- Worley J.T. (2023) Prospective associations between peer support, academic competence, and anxiety in college students, *Social Psychology of Education*, 26, 1017-1035.
- 吉田幸世・鈴木啓嗣・古川雅文・浅川潔司・東紀美子 (2002). 女子大学生の大学適応と将来展望に関する心理学的研究 (1). *日本進路指導学会第24回研究大会発表論文集* 22-23.

**Relationship between positive support at enrollment
and sense of college life adjustment**
— A study of university students in the dietitian training program —

Yasuko Sannomaru, Yuri Sakamoto, Sarasa Kogure

Abstract

In recent years, the dropout rate for college and vocational school students in Japan has remained at 2-3%. Dropout has a negative impact on universities and schools, and leads to a waste of time and money for the students themselves. Although the reasons for dropout vary, there is a possibility that a more fulfilling college life can prevent students from dropping out of school.

In this study, we examined the relationship between positive support (freshman camp and peer support) at the time of enrollment and college life adjustment (11 items) among 62 students enrolled in the Department of Medical Nutrition in the Josai University College of Pharmacy in the 2024. About half of the subjects participated in each support. More than 90% of the participants were satisfied with both types of support. The most common topics of consultation in the peer support sessions were taking courses and studying method.

The results of the college life adjustment to the university showed that the scores for positive items indicating adjustment to the university were higher than the scores for negative items indicating maladjustment to the university. In terms of the relationship between both supports and each item of the sense of university adjustment, there was a significant relationship between participation in peer support and items related to exam anxiety. In the future, it is desirable to formulate a method for both types of support so that many new students can participate in both types of support. In particular, peer support requires the development of an environment in which students can consult with each other on an ongoing basis about their academic work.

Key words: freshman camp, peer support, college life adjustment